

# 「学校スタンダード」って なんだ？

「〇〇スタンダード」と称する動きがいまブームとなっている。子どもの学習や生活場面での教師の指導を統一することを「宣言」するとともに、「何年生では、これができる」という到達目標を提示するものだ。たしかに、すべての教師がどの子にも同じ指導をすれば子どもが混乱しなくすむという意味では教育技術の可視化・共有化という側面はある。教師にとっても個別の事例を前にしていちいち悩む必要がなくなるという意味で、メリットとして受けとめられる可能性もある。さらに「約束」として周知し、これに依拠していれば保護者への説明責任も果たすことができる。

しかし、現実には「スタンダード」は「約束」ではなく「きまり」となり、「標準」ではなく「規準」として機能し、そこに喜劇と悲劇を生む。なるほど「スタンダード」の内容の一つひとつには、とんでもないことが書いてあるわけではない。だからといって、子どもにノートの使い方や返事のしかたなどの立ち振る舞いまで指示し、それを家庭や子どもたちの個別の事情を無視して押しつけるのは、あまりにも傲慢な発想ではないか。さらには「何年生なのだから、これができていなければならない」と到達を迫ることに、到達できない子どもが自己責任を問われて排除されてもしかたないのだという聞き直りさえみとれる。一方、教師に対しても一律に同じ指導を求めることは「あなたが判断する必要（＝権限）はない」といつているのに等しい。「スタンダード」が突き進むその先には、教師の専門職性の解体とゼロ・トレランスの世界が待っている。